

# 幼児画の心理と教育(二)

— 幼児画による人格診断 —



はじめに

前号においては、主として、幼年期における美術教育(絵画・製作)の目標、あり方、および描画の発達について概説したが、今回は、絵による幼児の人格診断に関する問題を取りあげてみる。

## 1 模写画による研究

読者の多くが知っているビネー式知能検査に、正方形と菱形を模写させる問題がある。(註1) われわれおとなから見ると、この両者を模写する困難さはほとんどかわらないように思われるが、幼児にこのテストを実施してみると、正方形は、四才六か月で七九%が模写出来るのに対し、菱形はわずか二・六%が可能であり、七才六か月でようやく七七・四%が合格するのである。これは、年少幼児では、正方形を知るものが多いが、菱形は知るものが少ないので、写生的態度の発達していない段階では、これを叙述表現的態度で描く

ので、模写が困難なわけである。

この他、格子正方形、円錐体などを幼児に模写させた研究があるが、模写が正しく出来るのは大体七才以後であって、それまでは、象徴的な叙述表現的態度で描かれることが多い。(註2)

このような簡単な幾何学的な図形や立方体ばかりでなく、幼児の描画の発達段階と生活年令を比較観察すれば、大体精神発達の程度を知ることが出来る。(註3)

## 2 人物画による知能検査

かつて、グッデナフ(Goodenough, F. L.) (註4) は、子どもに作業や取り扱い方の簡単な人物画をかかせて、そこに現われた項目の数を得点として、子どもの精神発達を測定しようと試みた。この方法は、我が国では、桐原葆見によって標準化されている。(註4) このテストは、ビネー式知能テストの相関も高いが、とくに人物に関する描画指導をうけていない幼児に用いた場合に限り信頼度が高いこ

守屋 光 雄

とを留意しなければならない。

### 3 プロジェクティブ・テクニクとしての 幼児画による人格診断

プロジェクティブ・テクニク (projective technique) というのは、子どもの抑圧されたニーズ (needs) や情緒を外部にプロジェクト (投射) する方法であり、これによって、子どもの人格の異常適応の原因を分析して発見し、適当な処置を講じようとするものである。その一つとして、幼児が自由に描いた絵を分析して、そのパーソナリティ (人格) を診断しようとするものがある。

#### (1) アルシュウラー (Aishuler, R. H.) とハットウィック (Hatwick, L. B. W.) の研究

アルシュウラーとハットウィック両女史<sup>(註5)</sup>は二才ないし五才の幼児の自由画の色彩、ストローク (strokes)、絵具のかたまり (masses) などと性格との関係について詳しい研究をおこない、たとえば、赤、黄、オレンジのような暖色を好んで使う幼児は、よい適応性を持ち、同情的で協同的であるが、青、黒、褐色などの寒色を好む幼児は、自分のニーズや感情を抑圧しているものが多いことを指摘している。主な色について、簡単に述べると、

赤は、それが縦または横のはげしいストロークで使用されるときは、攻撃的な態度を示すが、軽快な丸味のあるストロークで描かれ

た場合は、愉快な、愛情にみちた情緒的経験を反映する。

青は、不安や恐怖を示す場合が多い。

黄色は、他人に愛情を求めるときに多く使われる。

黒色は、家庭で強い抑圧をうけた幼児に使用される。

褐色を好む幼児は、あまりに排泄のしつけがきびしかったり、あまりに潔癖に育てられたものが多く、夜尿の子どもにもよく使われる。

これらの色は、単独でもこのような意味をもつが、これらが重ねてぬられた場合、色がまぜあわされた場合などにも、意味がちがってくる。

アルシュウラーの研究は、我が国でも、久保貞次郎、宮武辰夫らによって紹介され、またある程度実証されているが、川口勇らによって批判もされ、私も検討している。<sup>(註5)</sup>

アルシュウラーたちの研究によって、われわれは、幼児が好んで用いる色彩に、その幼児の内面生活におけるニーズやエモーションが、どのように、プロジェクトされるかの一端を知ることができると。しかし、右に述べたような色彩と人格の関係を、そのまま機械的に、どの子にもあてはめることは危険である。アルシュウラーの研究が、アメリカにおける二才から五才までの幼児を対象とし、しかも色だけでなく、色のおき方、ストローク、マッス・パターンなどの条件はもちろん、その他、ひとりひとりの子どもについての詳しい研究をおこなった上で診断もおこなっていることを知って、さ

らに読者のような幼児教育の現場のかたがたの協力によって我が国の幼児についての研究が進められることを切望する。

(2) 浅利篤の診断法

浅利篤は、アルシュラーらの研究にも刺戟されて、自由想像画すなわち無条件テスト(色彩選択の自由、形の自由、題材の自由、材料・用具の自由、指導と妨害からの自由)による児童画に表われた色彩、ストローク、形(類型)、位置、象徴の意味を知り、その総合的な判断の上に、子どもの人格診断をおこなっている。色彩の意味は、第一表に示すように、色はそれぞれ単独に意味をもつと同時に、他の色と組合わされて、別な意味をもつ。また、同じ色でも、

青色、濁色、明色、暗色によって意味が変わってくる。  
また、同じ色でもストローク(筆致)によって、意味が異なる。例えば、横のストロークは、一般に激しい興奮、否定的な感情につながっているが、縦のストロークは、肯定的、自制的な意味をもつ。さらに、同じ色でも、それが画面上のどの位置にぬられているかによって、意味が違ってくる。浅利によって、現在、顔面投射、体軀投射、頸喉部投射の三つの構図型が確認されている。(第二表) これら三つの構図型を画面に於てはめてみて、色彩の位置における意味の違いを掴みとるわけであるが、すべてこの九分割法によるのみ診断ができるわけでない。

形(類型)の意味というのは、特定の色(主として紫色)が、特

第一表 色彩の意味

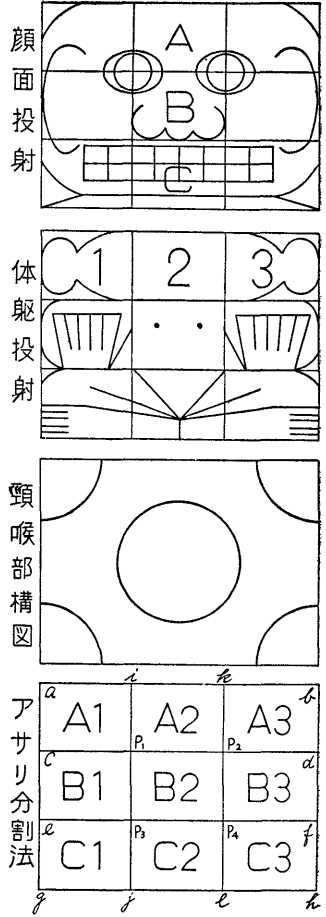
番号	色	心理的生理的意味	発見
1	白	警戒心・失敗感	浅利
2	黒	恐怖心・母ヒステリー	"
3	赤	不満・批難・攻撃・健康	"
4	橙	極度の愛情欠乏	"
5	黄	愛情要求	"
6	褐	欲求・食欲・物欲	"
7	緑	虚弱・疲労・悲哀	"
8	青	義務感・服従・従順	"
9	紫	疾病傷害とその影響	"
10	桃	心痛・熱感(紫代用)	"
11	灰	不安(黒代用)	"
12	黒・赤	母の叱責、不在、死亡、教師	後藤
13	黒・黄	父の叱責、不在、死亡、教師	浅利
14	黒・褐	極度の愛情不足・盜癖	浅利・長谷川
15	黒・青	諦め・意地悪	浅利・後藤
16	黒・緑	反目・虐待・継母	浅利・藤田
17	黒・紫	母の病的ヒステリー	浅利
18	黒・白	恐怖心	"
19	赤・青	嫉妬・羨望	香川
20	赤・緑	成熟・性的関心	浅利
21	青・橙	不潔・愚鈍	浅利・長谷川
22	青・黄	心配	浅利
23	紫・白	負傷失敗感・加害罪障感	浅利・長岡
24	紫・赤	出血・月経	浅利
25	紫・黄	疾病傷害時孤独感	"

定の型にぬられる場合は画面上の位置に関係なく、特定の疾患に対応する。類型としては、刺痛型(▲)咳型(○)チクチク型(点々)肺浸潤型(帯目)、脊柱型階段状、柵状、肋骨類型、気管肺類型、肺胞類型(ぶどう状、縫合型(点線)その他が発見されている。  
また、自由想像画にあらわれた種々のモチーフは、第三表に示すように、家族関係その他の象徴である。  
浅利説は、精神分析学、臨床心理学、精神衛生学における無意識心理すなわち、プロジェクトイヴ・テクニクと同じ理論の立場に立ち、さらに、児童画が大腦の見取図であるという表出理解の基礎理論たるアイソモルフィ

第三表 形態の象徴

 山	 太陽	 旗	 花	 円
 灯台	 蛸	 亀	 自動車	 三角
 双子山	 海	 船	 チューリップ	 逆三角
 飛行機	 鯨	 象	 自動車	 四角
 キリン	 家	 鬼	 蛇	 馬
 犬	 タンク	 カッパ	 バカと云れる	 枯木
 フクロ	 ゴジラ	 蝶	 鯉のぼり	 鉄砲
 おばけ	 松	 木	 二本の木	 枝ある木

第二表 位置の法則



ズム (Isomorphism)、身心同型説心的現象と生理的過程との構造および形態に共通するものがあり、相互に対応し且つ並行しているとの見地)にも通ずる、生理的心理的仮説に基き、さらに、統計的見地や自己の体験や発見で裏付けられている。

しかし、現場教師の一部には、無批判な盲信者があつたり、学者の中にも、その理論的根拠が薄弱なところから、非科学的の独断として非なんする者も少なくない。しかし、我々のとるべき態度は、これらの方法(またはその結果)を盲信(または狂信)することでもなく、逆に頭ごなしに、非科学的な迷信として、罵倒し去ることもない。すすんで、これらの研究に協力し、実証的資料を豊かにすると共に、その理論的根拠を確実強力なものにするよう努力すべきである。

私も、二、三年来、浅利篤の自由想像法に関する文献的、事例的、統計的研究をおこなってきた。(註7) 紙数の関係上、それらの研究の中、主として、同法によ

る診断と両親や保育者による観察、専門医師による診断、CATその他の投影法による診断との一致度に関する数計的処理の結果の一部について述べる。被験児は私が所長をしている幼年教育研究所付属幼稚園児約一〇〇名、自由想画法による自由画を浅利篤ならびに門下のベテラン長谷川望、香川勇に診断してもらった。その結果

① 浅利らの診断と保育者、両親の観察、医師の診断とを比較すると、診断困難の約十例を除く症例八七の中、一致したのも四六（男児二〇、女児二六）、不一致のもの四一（男児二四、女児一七）、一致率は五三%、数値からみると女児がやや高い（六〇%）。

② 浅利の診断指標とも言うべき色彩、形態、投射の各カテゴリーについてみると、数値の上では、これら三指標の中、色彩指標が最も多く出現し、ついで、形態、投射の順であるが、診断の一致率は、それぞれ五七%、五七%、七一%である。色彩指標では、紫の一致、不一致が高い頻数を示すが、形態指標では、母を象徴する乗物（バス、汽車、船）および父を象徴する太陽が極めて出現数多く且つ一致率も高い。投射指標については、女児においてとくに適中率が高く（九九%）三指標中一致率が最も高い。

③ 浅利らの診断結果と、CAT、PFT、人物画テスト、指絵、その他の投影法の結果を数的に比較することには、多くの困難と問題があるが、事例ごとにそれらの関係を調べると、一致した特性を指摘できるケースがかなりある。

この資料だけで、浅利診断法の幼児における適中率について断定

的なことは言えないが大体次の点が指摘出来ると思う。

① 自由想画法による幼児画診断における適中率は、浅利らが小中学生ないしはそれ以上の年令の青少年についておこなった結果よりも低く、この結果は、山田茂ら（註<sup>8</sup>）が、歯芽疾患あるいは歯痛のある幼児および学童について、浅利の自由想画法による診断と、医師の診断を比較検討した結果、学童における適中率は、七八・五%であるが、幼児における適中率は低かったという報告と同様、発達段階との関係が考えられる。

② 浅利らの診断中、診断困難のケースが約十例あったが、これらの多くは、幼児画にしばしば見られる錯画や種々の形態の羅列画であった。

③ 投射指標は、幼児においても、比較的適中率が高かったが、これを顔面投射、体軀投射、九分割、四分割の何れとみるかについて、診断者間に判定のくいちがいが生ずる場合があり、このことが診断を不安定にする結果を招くことがある。

④ 比較的適中率が高かったものは、父の象徴としての太陽や、母の象徴としての乗物と、それぞれの色彩言語のように、出現数が多く指標の判別が比較的容易で、且つ、研究がすでに相当多く積み重ねられたものである。すなわち容易にカテゴリーが判別出来るものは、幼児においても適中率が高いが、反面、幼児画には、判別の容易なものも必ずしも多くないところから、適中率が低くなる傾向がある。したがって、幼児における浅利診断法には、適用範囲ないし

は限界があり、幼児画による人格診断にあたっては、前述のアルシ  
ューラーや宮武辰夫らの診断法、一連の人物画テスト、その他の投  
影法など臨床心理学的診断法を併用することがのぞましい。

(右に述べたもの他、プロジェクトイヴ・テクニクとして絵  
による人格診断法には、人物画テスト、家族画テスト、指絵その  
他があるが、すでに与えられた紙数をこえているのでこれらの診  
断法については次号に述べることにする。)

(註1) 鈴木治太郎 実際の個別的知能測定法 昭和二十三年修正 東洋図書

田中寛一 田中ベネー式知能検査法 昭和二十九年改訂 日本文化科学社

(註2) Volkst, H. Primitive Komplexqualitäten in Kinderzeichnungen (1924).  
Fortschritt der experimentellen Kinderpsychologie (1926)

依田・中野・後藤訳 実験児童心理学の進歩  
加藤正英 格子正方形模写における形態把握並びに描写の發生的研究 実験心理  
学研究第一巻昭和十一年

(註3) 模写画による人格診断テストとして、ブルードモー (Prudence, M.) の絵によ  
る検査診断テスト、その他抽象的な図形を模写させる方法として、レヴィン  
(Leving, K. N.) およびグラッシ (Grass, J. R.) による描画ロールシャッパ法  
(クレスバーン (Hellersberg, E. F.) による描画完成法、ベンダー (Bender, L.  
A.) の「ゲシ」オタルテストなどがある。

Hellersberg, E. F. The Horn-Hellersberg test and adjustment to reality.  
Amst. J. Orthopsychiat, 1945, 15, pp. 690-716.

Bender, L. A. Visual-motor gestalt and its clinical use, Research Monogra-  
phis No. 3. Amst. J. Orthopsychiat 1938.

(註4) Goodenough, F. L. Measurement of intelligence by drawing 1926.  
桐原葆児 自由画による幼年児童知能テスト 福村書店  
山下俊郎 改訂幼児心理学(四〇一—四一頁) 朝倉書店

人物画テスト採点標準 次の各項に一点を与える。  
頭、脚、腕、胴、胸の長さ、肩、腕と脚のつけ方、同上の正しいもの、頭、頸の  
りんかく、眼、鼻、口、鼻と口とのりんかく、鼻孔、毛髪、同上のすすんだも  
の、衣服の部分二つ、衣服の全部、衣服の部分四つ以上、衣服の種類完成、指、

指の数を正しきもの、指の細部、拇指の分化、掌、肩あるいは腕の関節、脚の関  
節、頭の割合、腕の割合、足の割合、腕と脚のつけ合、踵、描線し  
かり、描線かさらに良好なもの、頭のりんかく、胸のりんかく、腕および脚のり  
んかく、顔貌、耳、耳の位置と割合、眉または睫毛、両眼の曠、眼の形、眼の向  
き、顎と額、顎の突出、横向き、さらに優秀な横向き

年齢	知能年令	点数
6	6	1, 2
7	7	3
8	8	4
9	9	5
10	10	6
11	11	7
12	12	8
13	13	9
14	14	10
15	15	11
16	16	12
17	17	13
18	18	14
19	19	15
20	20	16
21	21	17
22	22	18
23	23	19
24	24	20
25	25	21
26	26	22
27	27	23
28	28	24
29	29	25
30	30	26
31	31	27
32	32	28
33	33	29
34	34	30

(註5) Alshuler, R. H. and Hartwick, L. B. W. Painting and personality Vol. 1,  
Vol. II, 1947.

守屋光雄、幼稚園児 金子書房  
守屋光雄他 児童画と性格 金子書房  
宮武辰夫 幼児の絵は生活している 栗山書房  
扇田博元 絵による児童診断法、れい明書房  
川口 勇 創造美術をこえて、れい明書房  
久保貞次郎 色彩の心理 大日本出版社  
アルシウラー著 久保貞次郎訳 色彩の心理(フリント)

(註6) 浅利篤 児童画の秘密、れい明書房  
浅利篤 児童画と家庭、れい明書房

中西貞男 児童画の読み方、れい明書房  
その他、日本児童画研究会より多数のプリントが出版されている。同会本部、  
盛岡市下野川字赤藁一の六

(註7) 守屋光雄 児童画による人格診断の臨床実験的研究①②③  
日本心理学会第二十一、二十二、二十三回大会発表論文集  
守屋光雄 幼児画の診断における浅利説の意義とその限界 日本保育学会第十二  
回大会発表要項 幼児の教育 第五十八巻第九号

(註8) 山田茂他、健康教育の評価法としての児童画の利用―浅利氏自由想像法に対する  
検討―萌芽展望 第一五巻 第一号および第三号